

令和4年1月23日

## 南の風 2021 ウインターカップ考察Ⅳ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

2021ウインターカップを制した福大大濠の特長についてです。考察Ⅱと若干重複します。

まずディフェンスです。相手によってゾーンで守ったり、マンツーマンに変化させたりするチェンジングディフェンスが功を奏しました。またゲームの節目、節目で見せた、3/4Q1-2-1-1のゾーンプレスは相手にとって脅威となっていました。

福大大濠は1回戦から6試合戦って、失点の平均が61.8点でした。一番失点した明成戦の73点でも、1Qの30点を除けば、2Q13点、3Q16点、4Q14点というロースコアに封じました。破壊力のある明成のオフェンスをしっかりと抑え込んだのです。

ゾーンの形態は2-3をメインにしていました。相手のペイントドライブをダブルチームで止め、キックアウトパスを早めに想定して、3Pシュートに対応していました。そして相手がゾーンに慣れて来たと思うと、目先を変えてマンツーマンにチェンジし、相手の混乱を誘うように仕向けました。

例えば、相手のタイムアウト明けにディフェンスをチェンジすることで、相手がタイムアウトで確認したオフェンスパターンを機能させなくすることです。

また、ディフェンスをチェンジすることで相手のショットクロックを潰すこともできます。ディフェンス形態を咄嗟に変えることで、ガードが戸惑い思うように攻められなくなるのです。

さらにゾーンプレスもたいへん有効でした。1-2-1-1がメインでした。オールコートではなく、よく見ると3/4Qのゾーンプレスでした。スローインはさせ、レシーバーにドリブルを突かせるように仕向け、ラインディレクションしてパスカットを狙うという戦術でした。トップが奇数のゾーンプレスは、福大大濠がやったようにサイドラインディレクションが基本的な戦術となります。

そしてゾーンプレスのトップの位置に193cmの湧川選手を配置したこともより効果的でした。サイズのある湧川選手が前に立つと、ウイングスパン（手を広げた時の守る範囲）が長いので、ボールをカットされるのでは、という恐怖心が出てドリブルを選択する率が高くなるのです。もちろんタッチダウンパスに対しても、湧川選手の身長は有効でした。

コフィンコーナーでダブルチームに行き、そこから出るパスを狙ってカットするシーンも何回もありました。6試合通してやり切り、強力な武器になりました。

余談になりますが、私はこのトップの湧川選手のゾーンプレス見て、ある選手の顔が浮かびました。NBAの元ニューヨーク・ニックスのプレーヤー、パトリック・ユーイング（バルセロナ五輪で世界一に輝いた、初代ドリームチームの一員）です。213cmのユーイングもゾーンプレスではトップの位置に立ち、パスをカットし連続得点を奪い、相手チームの大きな脅威になったのを思い出しました。

話を戻します。福大大濠の選手は、こういったチェンジングディフェンスや、ゾーンプレスを全員の意思統一の下に、着実にこなしていました。

ともすると、仕掛けたはずの自チームが混乱してしまうリスクもあるのですが、見事にやり通していました。福大大濠の選手のバスケットボールIQの高さを感じました。

次号では、福大大濠のオフェンスと、ウインターカップ男子全般の感想でまとめとします。